

ゆうかり放送委員会提供

# ゆうかりに乾杯

第 151 回放送の概要 (2019 年 11 月 16 日放送)

## パーソナリティ

たろう

(佃 由晃)

なか

(中嶋邦弘)

くらら

(河野真紀)

あきこ

(村上明貴子)



## ミキサー

門ちゃん

(門田成延)

かりん

(妹尾優香)

会計

小山俊則

相談役

わだかん

(和田幹司)

## 1. ゲストコーナー(1) 社会福祉法人 三田谷治療教育院 明石市立あおぞら園・きらきら 副施設長 児童発達支援管理責任者 服部記昌さん、及び(株)ソワサポート代表 浅原奈緒子さん(69 陽会)

「児童発達支援」とは、発達が遅いし障がいのある未就学児が、日常生活における基本動作や知識技術を習得して集団生活に適應できるよう、発達支援することです。

服部さんは垂水小学校、垂水中学校、育英高校で学んだ。阪神大震災時は高校 3 年生で、震災発生時、家は死ぬかと思うほど大きく揺れ、荷物が散乱。片付けのため学校を休むと言っていた時、テレビや近隣を見ると大変なことになっており、しばらくの間通学出来なかった。高校卒業テストがなくなりそのまま卒業できた。進学については、卒業時は将来の夢はなく、したいこともなかった。その時の友人が、神戸医療福祉専門学校のパンフレットを持って介護福祉士になると言っていた。福祉のネーミングがいいと思った。親戚が学力に厳しく、大学に行く学力もなかったので親戚など周りを納得させるため「福祉」を選んだ。育英は男子校で専門学校は女子が多いこともきっかけになった。

医療福祉専門学校の、今はない医療福祉士科に入ったが、病院や老人関係のソーシャルワーカーを目指しており、障がい分野で働くことは頭の中に全くなかった。

福祉専門学校に 3 年、そして福祉系大学の通信教育を 4 年受け、病院や老人ホームの実習があった。



専門学校時代の病院実習

実習先に勤めている人達の態度から、利用者にとっていい支援がされているように見えず、陰で不平不満を言っていたので、福祉という名前はいいがドロドロしているように感じ、福祉専門学校を卒業する時はこの仕事はしたくないと思っていた。

津久井やまゆり園の障がい者殺傷事件があったが、若い頃の自分であれば殺しはしないが、何で障がいのある人達に気を遣ったり支援しなければいけないのかと思い、障がい者に対しては汚い、怖い、気持ち悪いと思っていた。電車で隣の自閉症の方がワ〜と言う声が怖かったし、ダウン症の方の自分たちの少し違う顔つきも当時は受け入れられなかった。障がいについて当時は自分の中では全くなく、どちらかという偏見を持っていた。小学校時代養護学校との交流があり、同世代の子どもたちが来て交流した時、一緒に関わっている周りの友だちが、先生にいいイメージを持ってもらうために、よだれが出ていたり、意思疎通の出来ない子どもたちと接していると思い、どうしてそこまで出来るのか自分の中で理解できなかった。中学校ではなかよし学級の子どもが時々クラスに入ってきて、机に鼻水やよだれをつけて逃げ去っていた。

福祉関係の最初の仕事は、西区の縦ノ木福祉会ゼノの村(知的障害者授産施設)で働くことになった。

当時は就職氷河期で、行きたかったハードロックカフェの正社員、海外研修のある企業、テレビのAD、など手あたり次第に受けたが、福祉専門学校で3年間、通信教育4年間学んだのになぜ関係のない会社を選ぶのかと言われたが答えられなかった。最終的にはお金が無くなり、日雇いで交通費を稼ぎ、就職活動をしていた。母親から一番いやな仕事をすれば後は楽になると言われ、福祉の道に進もうと思った時たまたま拾ってもらえた。ゼノの村では、利用者と同じ食堂で食べるので、3か月程は食べ物が喉を通らなかった。



ゼノの村入職の頃

当時、このような気持ちを持ちながら利用者と一緒に生活していく中で、農耕、陶芸、民芸などの作業のうち農耕を担当した。利用者の作業能力はまちまちであるがしっかり持っており、その人がいないと仕事が廻らなかった。情緒的にも感性豊かな人が沢山おり、服部さんが体調が悪くて休むと、次の日はアイドルになったような気遣いをしてくれた。このようなことから障がいとは何かと考えるようになった。知的にはハンディがあるが、何が障がいになっているのかを考えるようになった。障がいを持って生まれたのは本人の責任ではない。出来る人が助けてあげて出来ないところを補う。出来ないからといってその人の存在を否定的に見るのではなく、その人から癒されることもある。一つの仕事を一緒にしっかりとやり遂げられることから、徐々に気持ちの持ち方が変わってきた。

ゼノの村には5年間勤め、成人の障がいのある人を支援していると、児童期にこのような支援が出来ていればコミュニケーション(意思疎通)がとれていたのではないかと思うことがある。次は同じ法人内の児童の入所施設さわらび学園に4年間勤務した。障がいのある成人と児童との接し方の違いについては、変わることはないが、成人の場合、今ある能力を基に作業や生活を構築していく方法を考えるが、



児童の場合、支援をすればするほど成長して変わっていくので、やりがいを感じる。信頼関係が出来てくると、どんどん児童の方からやりたい、こういうことをしてほしいという要求が出てくる。ダウン症の成年が週末は里親の家に帰っていたが、里親が体調不良で老人ホームに入った時、支援することで公共交通機関を使って自分で帰ることが出来ていた。

カンボジアの支援を始めたのは、福祉の仕事の一つである募金活動をしたり、テレビで貧困のCMが流れているのを見て、貧困とは何かをリアルな現場を見て考えたいと思い、縦の木福祉会を辞めた時の退職金で、日本のNGOが運営するカンボジアの地雷障害者の村の畑を耕すボランティアツアーに参加した。その後その村に訪問すると、植えた野菜が枯れたりしていたので、継続支援が大事と思った。またカンボジアは物価が安く、日本で我慢した1000円がカンボジアでは色んな役に立つことを知った。学校が足りないという話も聞き、帰国後服部さんの思いに共感する人に声をかけ、ボランティアグループ「すろまい（夢）～コーン（こども）プロジェクト」が誕生した。カンボジアで活動する日本人NGOを見学し、そこから何が出来るかを探し、そのNGOのカンボジア人スタッフから小学校を教してもらい、教材とランドセルとして使える手提げ袋を寄贈した。



カンボジアボランティアツアー

## 2. ミュージック：たかとり救援基地復興隊「夢光る町神戸を」

## 3. ゲストコーナー（2）

2013年設立の「NPO法人スロラニユ（愛する）プロジェクト」の活動は、すろまい～コーンから変わった時で、当時支援するという会社がみつかり、その資金を基に小学校を作ろうということになった。それまでに何回か現地に行き、現地で支援してくれる人もみつかった。コムルー村のドントロー小学校は、村から本校に行くのに国道6号線を横断する必要があり、交通事故で年間2～3人亡くなっているというのを聞き、直ちに建設を決めた。しかし東日本大震災の後で寄付が入らなくなり、資金集めが大変だった。当時向井理さん主演のカンボジアに学校を作ろうという映画「僕たちは世界を変えることができない」があり、ボランティアを募集すると口コミでどんどん集まるので、カンボジアで取りまとめるスタッフが必要ということで、服部さんは現地に1か月半滞在した。バックパッカーで廻っている若者が、自分の計画を変えてボランティア参加し、日本人以外に韓国、オランダ、デンマークなど延べ700人ほどが参加した。



小学校建設ボランティア

学校を建設した後は政府に運営を任せた。学校名はカンボジア側でつけるようお願いしていたとこ

ろ「スロラニュープロジェクト」の名前を入れたいということで「私たちのスロラニュー小学校」と命名された。スロラニュープロジェクトは年に2回救急救命士、歯科医、元小学校の先生、モンテッソーリアン（浅原さん）などの専門家を現地に派遣している。2月には運動会を必ず行い、絵画教室をしたり、歯のブラッシング指導、遺跡を管理しているアプサラ機構に救急救命処置の指導を行っている。



私たちのスロラニュー小学校



スロラニュー小学校運動会



ブラッシング指導



アプサラ機構救急救命講習

小学校建設をしたことで、日本人は自分たちのためにこれだけやってくれている、と言って感銘を受けた現地のカンボジア人で日本語通訳ガイドのパンナさんが、スロラニュープロジェクトのスタッフになり、カンボジアに拠点が出来た。日本からカンボジアに定期的に行かなくても、学校などの支援先を訪問してくれるので、服部さんはそれまで日本での仕事は短期間で変えていたが、正規の仕事に就くことが出来るようになった。

2013年、三田谷治療教育院の生活介護の仕事に1年間従事した後、2014年に同法人のあおぞら園で仕事をする事になり現在に至っている。あおぞら園の仕事をしながら色々な取り組みをさせてもらっており、カンボジアも年2回訪問できるので安定して仕事を続けることが出来ている。あおぞら園は就学前の子



明石市立あおぞら園・きらきら



どもを受け入れており、担当業務は保護者との面談や、職員に対する指導などで、これまでの10年余りのいろんな分野の仕事の経験が役立っている。

今取り組んでいるのはクラウドファンディングで、障がい児者の方の啓発活動です。クラウドファンディングで行う「障がい理解の啓発映像シネアド上映プロジェクト」について、プロジェクト実施について以下の理由を掲げているので、これに共感した方から寄付を頂くことになる(期限は11月末)。

### 「障がい啓発」映像は暗いものばかり・・・

障害当事者のありのままのポジティブさが前面に押し出された映像を作成！！私が知っている車いすユーザーや視覚障害・聴覚障害のある方は決して、ネガティブではなく、ポジティブな方が多く、逆にエネルギーを頂いています。

しかし、障害当事者のみなさんの話を聞くと笑顔の裏には、我々が想像できない苦勞と努力があることを知りました。私が思っていた各「障害」の認識において、たくさん人の勘違いや理解不足があることに気づきました。

- サポートしなければいけない時にサポートする
- サポートしなくていい時は、見守るだけにします。

これは何も障害者だけでなく、子育てや教育現場、職場にも言えることだと思います。その子、その方を「理解」することが適切な関わりを豊かにし、お互いの可能性を認め合えることで、やさしい社会になることだと思います。

[https://camp-fire.jp/projects/view/196564?fbclid=IwAR38yl34pDwuo6gTYtQDtuRa9cg2xoUKAFdhGGUtuvb\\_amOlaHb4YgVECKO](https://camp-fire.jp/projects/view/196564?fbclid=IwAR38yl34pDwuo6gTYtQDtuRa9cg2xoUKAFdhGGUtuvb_amOlaHb4YgVECKO)

シネアドは、映画上映前の予告などの中に、有料で30秒とか15秒のCMが可能で、映画館という閉鎖空間で「障がい」というテーマを流す意味があると考えている。

第1回クラウドファンディングの子どもの啓発映像はすでに「アベンジャーズ エンドゲーム」と「コナン」で流した。

今回のPRビデオには浅原さんがトラの着ぐるみで出演している。



(服部さんの今後の抱負について)

服部さんは20代の頃の障がいのある人に対する気持ちから、今42歳になって、自分のように変わる人を少しでも増やしていきたいと思っている。関心がなかったわけではないが、知らなかったので

怖かった、敬遠していた。障がいのある人のことを理解し、ちょっとでも手助けしてあげていたら、地域で暮らしていけると思う。パニックになることについても、コミュニケーションがうまくいかないのが相手に伝わらなかったことによりおきる最終の行動であることが理解できた。管を付けた状態で生きている子どもさんの姿を見た時に、人が人に対し生きる価値について語るものではないと思った。人は生まれたからにはしっかりと生きていく権利があり、自分が変わることが出来た思いを、そうではない人たちに伝えて、応援団をつくっていきたい。

### （浅原奈緒子さんの活動について）

明石市立あおぞら園・きらきらの施設長であった飯塚由美子さん（現在は三田屋治療教育院の理事長）がソワサポートに来て、一緒に明石市社会福祉協議会のこども部会を盛り上げようという話をした時に、同行していた服部さんに出会った。スロラニュープロジェクトはそれから2年ほど経ってから誘われて参加した。初めてカンボジアに行った時、次回以降も参加して自分のやりたいことは何かを考えていた。浅原さんの専門は障がい児教育であり、浅原さんがカンボジアに行く前、現地では障がい児より貧困が先と言われていた中で色々支援をしていると、障がい児教育に目を向けてくれる現地の人が増えてきた。そのような状況変化の中で浅原さんの活動が始まった。

現地での障がい児教育は、現地スタッフのパンナさんが色んな所に明るく、紹介された場所が6000人の生徒がいるワットポー小学校の校長先生、村には貧困の他ダウン症の子どもも探してくれていたのので障害児支援ができ、ワットポーの小学校では個別療育も出来るようにお膳立てしてくれた。日本とは言葉、環境が違うが、モンテッソーリアンである浅原さんは、モンテソーリ教育が言葉を介さないで物事の対話で行うので、物を見せそれを一緒に感じて感覚の教育や数の教育をし、また気持ちのコントロールも物を介して行い、言葉で教えるのではないため、言葉の違いはあまり問題ではない。難しいことを教える時は言葉は必要だが、村で出会った子どもたちに何かをすとか、ワットポー小学校で発達が緩やかな子ども、発達でこぼこしている子どもたちにアプローチする時は言葉はあまり必要ではない。

カンボジア人のお母さんも日本と同じで、自分の子どもは障害者ではないと言う。ワットポー小学校は皆が選んで来ている学校なので意識が高い。カンボジアでは障害は家族の先祖の問題と思われており、自分の家をけなされたように思う。意識改革を同時に進めていく必要がある。



ワットポー小学校



ワットポー小学校の先生方への教育支援





障がい児ディサービス個別課題



ワットポー小学校障害児特別支援

浅原さんは、(株)ソワサポートのHP (<https://www.sowersupport.com/>) の他、浅原さん他が一緒に行っているボランティア活動に関わるHP「こどもサポート cuore」 (<https://www.kodomocuore.com/>) がある。乳幼児期の特別支援教育・療育についてというテーマで、全11回の講演動画を公開している。将来このサイトはカンボジアなどいろんな国の人にアクセスしてもらいたいと思い、出来るだけ大事な情報をアップしたいと思っている。内容は発達障害の特性や対応に関するもので、わかりやすく説明するように心がけている。



#### 4. 地域瓦版

- まちの文化祭 2019 が 11 月 24 日(日) 10 時-16 時、新長田のふたば学舎で開催される。兵庫高校生(創造科学科 1 班)はベトナム料理と長田のコラボ料理の屋台を出展予定。まちの文化祭の中で、49 陽会の和田幹司さんの神戸長田文化特別賞の授賞式があります。また和田幹司さんは 9 月 1 日に内閣府から「エイジレス賞」を受賞されました。年齢にとらわれず自らの責任と能力において生き生きとした生活を送られているという理由です。
- 一七市拡大版が 11 月 24 日、10 時~15 時、鉄人広場で開催されます。長田区内の障がい者の作業所を中心に、市内から福祉の団体が集まる「福祉フェア」を震災から毎年開催されている。



## 5. エンディング

ユニバーサル社会に向かい、福祉とは何か、何が求められているかよく言われる。我々国民が理解していかなければならない課程を、本日のゲストは自ら現場に身を投じ苦勞して勉強し具現化しているように見受けられた。

今、障がいのある方がむしろ生きづらくなっている面が強くなっているようにも感じる。障害のある人に対する接し方、意識は、日本はヨーロッパなどに比べ低いように感じる。日本人の意識を高めるとい意味で服部さんの取り組みは大事と思った。

障がいのある人に偏見を持っていたあの服部さんがこのように更生され、啓発する立場に立たれたことに希望を見出した。

放送音声は、FMYY の HP および「ゆうかりに乾杯」の HP で視聴いただけます。

<https://tcc117.jp/fmyy/?cat=51>

[http:// yukari-ni-kanpai.sakura.ne.jp/](http://yukari-ni-kanpai.sakura.ne.jp/)